

目次

一、葛城

畝傍山……8／二上山の石……10／葛城の峠……12／高間……14／綿弓塚……16／当麻寺……18／石光寺……20

二、明日香(1)

いにしへの塔……22／広嚴寺……24／物部氏滅亡……26／法興寺……28／推古天皇と蘇我馬子……30／劍の池……32／軽から松隈へ……34

三、明日香(2)

明日香川……36／南淵……38／川原寺……40／橘寺……42／真神の原……44／甘櫃丘……46／山田寺……48

四、藤原鎌足と妻たち

藤原鎌足の誕生地……50／鏡王女と藤原鎌足……52／鏡王女……54／粟原廃寺跡……56

五、天武・持統朝懷古

雷丘…58／島の宮勾の池…60／松隈大内陵…62／磐余の池の悲しみ…64／大伯皇女…66／安騎の大野…68／かぎろいの里…70

六、藤原京と香具山

本薬師寺…72／藤原宮…74／泣沢の神社…76／埴安の池…78／香具山…80

七、吉野

耳我の嶺…82／吉野の誓い…84／宮廷歌人柿本朝臣人麻呂…86／象山…88／文武天皇…90／吉野山…92

八、初瀬の川音

速総別王と女鳥王…94／衣通郎女…96／豊泊瀬…98／泊瀬の相聞…100／室生寺…102／長谷寺…104

九、都祁

鬪鷄王国…106／都祁水分…108

十、竜田川

小桜の嶺…110／川沿いの岡辺の道…112／磐瀬の杜…114／恐の坂…116／竜田の神奈備…118

十一、竜田川

竜田川…120／三室山…122／「ちはやぶる」の歌と竜田川…124

十二、斑鳩から秋篠へ

法隆寺…126／矢田…128／平群谷生駒谷…130／薬師寺…132／唐招提寺…134／菅原…136／暗峠…138／秋篠…140

十三、山の辺の道

三輪の崎…142／海石榴市…144／大神神社…146／三輪山との別れ…148／巻向の川音…150／巻向の穴師…152／崇神天皇…154／引手の山…156／倭は国のまほろば…158／布留…160／布留の高橋…162／業平道…164

十四、奈良(1)

飛火野…166／春日野の野焼き…168／木辻…170／元興寺と元興寺の僧の歌…172／奈良の明日香…174／新薬師寺…176／高円の野辺の秋萩…178

十五、奈良(2)

磐之媛命…180／平城天皇…182／采女祭…184／南都春日社興福寺…186／三笠山…188／奈良坂…190

十六、天平の暗雲

藤原不比等…192／長屋王…194／法華寺…196／大仏造立…198／天平の暗雲…200／大伴
宗家佐保の宅…202／藤原仲麻呂…204／西大寺…206

地 図 208

あとがき…210

口絵写真撮影——長尾 宏

大和百話——記紀・万葉から前川佐美雄まで

畝傍山(火) (うねびやま)

畝火山屋は雲とる夕されば風吹かむとそ木の葉さやげる

伊須気余理比売

(『古事記』)

「香具山は畝傍ををしと耳梨と相争ひき」と中大兄皇子に詠まれた畝傍山が、意外に暗いイメージを負って見えることがあるのは、この山に幽界の気のただよふの感ずるからである。近鉄橿原神宮前駅から約三〇〇メートル、神武天皇を祀る橿原神宮は明治になっての創建になる神宮で歴史は新しいが、初代天皇の即位を象徴する広い玉砂利の掃き清められた齋庭(いばら)の明るさが、いくらか不自然に思えなくもない。第十代崇神天皇からは、王朝は三輪山山麓に遷り三輪王朝がはじまるが、それ以前の九代は葛城王朝である。その本拠葛城山地からは東北にある畝傍山は、東北または西北の方向に黄泉の国があると考えた古代の宗教思想からいっても、まさに幽界を思わせたのである。橿原神宮を出て山麓を北進すると、神武の畝傍山東北陵が鎮まる。北にすぐ第二代綏靖天皇の桃華島田丘(たかのう)上陵がある。西南の山麓にまわると、第三代安寧天皇の御陰井上陵(みほといのえ)が、さらにまわると第四代懿徳天皇の緋沙溪上陵(まなごだにのえ)がある。初期四代の天皇陵がこうしてこの山麓をとりまくようにあるのも、この山を幽界と見ていたことを裏づける。

『古事記』神武の条によると、神武の死後御子当芸志美々命は、継母伊須気余理比売に通じようとした。神武と伊須気余理の間には三人の皇子があった。当芸志美々には、その三人が邪魔になる。三人を

ひそかに殺そうとしているの知って、伊須気余理は危険を知らせる。それが掲出歌である。畝傍山は屋は雲がかかっており、夕方には風が吹こうとしている。木の葉が騒いでいると歌う。夕方に事件がおころうとしている、危険が迫っているという意味を隠しているのだが、畝傍山が黄泉の国であったからこそ、暗示することのできた意味である。

この歌の前にも、「狭井河よ雲立ちわたり畝火山木の葉さやぎぬ風吹かむとす」という同趣旨の歌がある。「狭井河よ」は狭井河からの意。三輪山山麓の大神神社から山の辺の道を北へ進み、狭井神社を経て坂を下ったところに、一跨ぎの小川のあるのが狭井河である。伊須気余理は、大物主神と勢夜陀多良比売(せやだたらひめ)の娘であった。大物主は勢夜陀多良の美しさに見惚れ、丹塗矢(にぬりや)になって厠(しづ)に流れ下って、勢夜陀多良の陰(ほ)を突いた。勢夜陀多良は驚いて、矢を持ち来て床に置くとたちまちに美男となった。これは三輪山神話の一つである。ちょうど狭井河を越えたところ、眼前にひらける斜面がある。そのあたりを、伊須気余理の家居のあたりと伝える。

「狭井河よ雲立ちわたり」という歌詞にちなんでであろう、出雲屋敷と呼ぶ。「狭井河よ」の歌碑がある斜面を上り、少し左に出ると、畝傍山が望める。



畝傍山